

氏名	りん せんせん 林 茜茜
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲術第24号
学位授与の日付	平成22年9月30日
学位授与の要件	学位規程第5条
学位論文の題目	言いさし文の研究 —自然会話とブログの場合—
審査委員	主査 今泉 喜一 副査 金田一秀穂 副査 萩原稚佳子

学位論文の要旨

本研究は、語用論と認知言語学の観点から、現代日本で使用される言いさし文の諸相について分析することによって、以下の点について明らかにしたい。①自然会話における言いさし文の男女差があるかどうかを考察する②自然会話における言いさし文とブログにおける言いさし文のそれぞれの特徴及び異同を比較する③言いさし文を省略されたものとして考えず、モダリティの1つ——「ほのめかし・態度保留」として捉える仮説を提示する。例文を挙げながら、この仮説の妥当性を論証する。

自然会話およびブログにおける言いさし文のデータを分析し、接続助詞が終助詞のような働きをしている言いさし文を対象とする。本稿では、言いさし文を「Z+X+C+M+Y」と表すことにする。「Z」は全体の先行文脈である。「X」は言いさす文脈であり、先行文である。「C」は文の接続助詞である。「M」は言いさし文の文末のマークである。「Y」は言いさされた情報を示す。ただし、「Y」は必ずしも存在するわけではない。むしろ、自然会話における言いさし文には「Y」のないもののほうが多い。

明示化された先行文脈に基づき、後件の復元が不可能、あるいは復元してもズレが生じる場合は新たな研究方法—モダリティの角度から分析する。

男性による言いさし文と女性による言いさし文をそれぞれ第一グループ、第二グループ、第三グループに分ける。第一グループというのは最も多く使われる言いさし文の集合である。第二グループというのは比較的多く使われる言いさし文の集合である。第三グループというのは出現頻度が低い言いさし文の集合である。（下の表に示す）

男女差 グループ	男性による言いさし文				女性による言いさし文			
	第一グループ	ケド (206) (30.43%)	テ(173) (25.55%)	カラ (138) (20.38%)		テ(253) (43.77%)	ケド (152) (26.30%)	カラ(76) (13.15%)
第二グループ	シ(81) (11.96%)				シ(56) (9.69%)			
第三グループ	タラ(23) (3.40%)	ト(22) (3.25%)	バ(13) (1.92%)	ノニ(9) (1.33%)	ト(11) (1.90%)	ノニ(11) (1.90%)	タラ(8) (1.38%)	バ(5) (0.87%)
	ガ(7) (1.03%)	ノデ(4) (0.59%)	タリ(1) (0.15%)		タリ(3) (0.52%)	ガ(2) (0.35%)	ノデ(1) (0.17%)	

第一に、自然会話における言いさし文の男女差についてであるが、各グループに現われた接続助詞における言いさし文の種類は男女とも大体一致することが分かった。全体的に見れば、よく使用される接続助詞における言いさし文とあまり使われない接続助詞における言いさし文については、男女を問わず、ほぼ同様であることが分かった。日常会話における男性がよく使う接続助詞の言いさし文と女性がよく使う接続助詞の言いさし文の顕著な使い分けはないだろうと考えられる。それはなぜかといえば、各言いさし文における接続助詞自身が文の接続上果たす役割の文法的本質によって使用頻度が定められるからである。具体的に言えば、第1グループと第2グループの接続助詞「ケド」「テ」、「シ」、「カラ」を用いた言いさし文は文法的な接続性は単文に近い性質を持ち、独立性が強いと見られるのに対し、第3グループの接続助詞「タラ」、「ト」、「バ」、「ノニ」、「ノデ」等を用いた言いさし文は文法的に複文に近く、前後の句節との繋がりがより緊密であり、独立性が低くて従属性が高いと見られる。この点については、三上(1972)の「軟式」、「硬式」と南(1993)によるA、B、C三種類の分類によって説明もされた。

第二に、言いさし文の自然会話とブログでの比較についてであるが、「シ」節で終わる言いさし文の例文を参考にしながら、「X部分の肯定／否定形」、「品詞及びフォーム」、「述べられる事柄(1つ／2つ)」、「文末M」、4つの項目から分析した。まず、「X部分の肯定／否定形」については、両者とも「X部分の肯定形」の言いさし文の使用頻度が圧倒的に多かった。つまり、「シ」で終わる言いさし文は自然会話とブログを問わず、肯定形を使う傾向があるのではないかと考えられる。次に、「品詞及びフォーム」については、自然会話とブログにおける言いさし文は同様に「動詞述語文」の使用が多かった。これは動詞述語文の形態変化が多く、動詞と助動詞はテンス、アスペクトなどを表すことができるため、述語文の中で使用範囲と出現頻度も高くなる

からではないかと思われる。更に、「事柄1つ/2つ」については、自然会話における言いさし文とブログにおける言いさし文ではどちらにも共通して、1つの事柄を表す「～し」が2つの事柄を表す「～し～し」の使用よりずっと多かった。この点では自然会話とブログは同様であり、1つの事柄を取り上げて、接続助詞「シ」を付け加えて、文を完成させる。これは言いさし文の1つの特徴であると言えよう。最後に、「文末M」については、自然会話における言いさし文には「～し+句点」のパターンが一番多かった。これはブログにおける言いさし文も同様である。しかし、「～し+終助詞」のパターンでは自然会話における言いさし文の中でよく使われるのに対し、ブログにおける言いさし文にはあまり現われなかった。更に、ブログにおける言いさし文では「。。。」、「…」、「…。」、「～～」、「♪」、「～♪」等の符号がよく使用される。ブログ作者はこれらの符号を自分自身の気持ちを表すための1つの主な手段としていうのではないかと見られる。自然会話の場合の声調（声を伸ばしたりする）や、表情と異なり、ブログにおける言いさし文の特有な表現手段であると考えられる。同時に、ブログ作者の意図を伝え、言いさし文を完結する標識とも見られる。

第三に、言いさし文におけるモダリティー「ほのめかし・態度保留」についてであるが、「シ」、「ケド」、「カラ」、「テ」4つの接続助詞における言いさし文を主に分析した。言表事態のモダリティ、伝達のモダリティ、発話の意味の3つの側面から各接続助詞で終わる言いさし文はどのようにモダリティを表しているのかを論証し、各接続助詞で終わる言いさし文をモダリティー「ほのめかし・態度保留」の角度から解釈することの妥当性及び4つの接続助詞の終助詞的な機能を明らかにした。

本稿では「ほのめかし・態度保留」の定義を以下のように定めた。話し手・聞き手は同一の発話場面において先行文脈を通じて共通理解に達しており、言語化された情報以上に明示化されていない発話の意味をも聞き手に伝えるために、話し手が相手に「察してもらいたい」という期待を持ちつつ、その意味を明示化せずに働きかける伝達の方法である。

終助詞的な「シ」節の機能：命題に「シ」節を使用することによって、命題と同類の事柄が他にもある事を示し、命題の輪郭をぼやかし、全体の発話の意味をほのめかして話し手の態度を保留し、発話文を和らげることができる。

終助詞的な「ケド」節の機能：命題に「ケド」節を使用することによって、文を完結させる。逆接の意味を示し、「命題を不確定・否定」という話し手の態度保留と、順接の意味を示し、「命題に基づき、相手に意見（同意）を求める」という話し手の態度保留を表す場合がある。文全体を和らげることができる。

終助詞的な「カラ」節の機能：命題に「カラ」節を用いて文を終結する。「原因」を表す「カラ」節及び「条件」を表す「カラ」節に分けられる。「原因」の「カラ」節は、明示化された命題の確実さをぼやかし、話し手の態度を保留して発話の意味をほのめかし、文全体を和らげることができる。「条件」を表す「カラ」節は、聞き手

に話し手の主観的な意図を婉曲に伝える機能と、「命題+カラ」を通じて、ある前提条件を相手に提供し、この条件に基づいた上で、相手に動作を起こすことを勧める婉曲表現の機能がある。

終助詞的な「テ」節の機能：接続助詞「テ」で文を完結することによって、発話者の意見・考えを保留し、発話文を和らげたり、明示化された命題をぼやかしたりする働きがある。

「普通に就職していると思うけど。」の言いさし文を例に考察する。命題—「普通に就職していると思う」に対する「判断のモダリティ」（松木・森野）（本稿は言表事態のモダリティ）は「断定」と解釈できるけれども、「伝達のモダリティ」—「命題の断定に対する不確定をほのめかし、話者の態度保留」は、松木・森野（2000）の分類—「命令、禁止、許可、依頼、申し出、勧誘、願望、疑問」—の中のどれにも当てはまらない。発話者が「命題+接続助詞」の言いさし文を用いて、相手に伝達していることから見れば、「伝達のモダリティ」は当然存在するわけである。したがって、松木・森野の言う「命令、禁止、許可、依頼、申し出、勧誘、願望、疑問」以外に、言いさし文におけるモダリティ—「ほのめかし・態度保留」も「伝達のモダリティ」に属するのではないかと考えられる。この点を主張したい。

審査結果の要旨

〔論文の内容〕 本論文は日本語の言いさし文の研究を通じて日本語の「伝達のモダリティ」に「ほのめかし・態度保留」の項目が欠けていることを発見した。本論文はこの項目を新設することを提案している。論者は言いさし文として、接続助詞「ケド・カラ・テ・シ」などで終わらせてしまう文（とりわけ「シ」で終わらせる文）を研究対象とし、自然会話とインターネットのブログにおいて調査を行った。データを数値で示し、語用論と認知言語学の観点から結果の分析を行った。言いさし文使用の大きな男女差のないこと等が判明したが、本論文においては以下のようなより重要な考察を行っている。

〔論文の意義〕 先行研究には言いさし文を（A）「省略された不完全な文」と（B）「省略された形であっても意味的には完全な文」の2種類でとらえるものがある。すなわち、接続助詞的なものを（A）そのまま接続助詞的なものとして解釈するタイプと、（B）終助詞として解釈するタイプのものがあるとの理解である。一般に文があれば、そこには何らかのモダリティが指摘できるのであるが、先行諸研究では、言いさし文にモダリティを見いだしていない。（B）にモダリティが認められない理由はないはずである。（A）においてさえも同様に考えられる。そこで、本論文ではモダリティの定義を再検討し、先行研究を再検討した結果、言いさし文は「伝達のモダリティ」を持つが、その下位区分としての適切な項目がないことを発見した。そこで、

新たに「ほのめかし・態度保留」項を設置すべきであるという結論に達した。これは学界に問題提起して研究を促すべき課題である。本論文においては、言いさし文の統計的現況を明らかにしたにとどまらず、先行研究の気づかなかった重要な欠落を明らかにし、補完する試案を提示したという点に大きな意義が認められる。

〔論文の評価〕 論者は自然会話とブログにおける言いさし文を根気よく収集し、種別別に頻度を明らかにする研究を行いつつ、上記のような価値のある考察を行った。この点が高く評価できる。